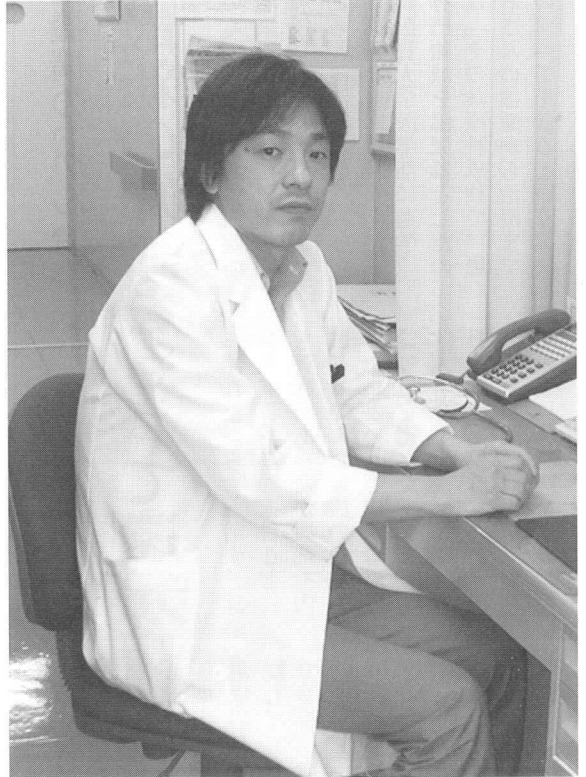


函館おしま病院副院長

## 伊達 基 氏



だて もとい  
平成9年東海大学医学部卒業。  
同年東海大学医学部附属病院血液内科入局。海老名総合病院血液内科、小田原小澤病院血液内科を経て、平成18年函館中央病院の内科・消化器科医長に就任。平成20年4月函館おしま病院の副院長に就任、現在に至る。  
日本臨床血液学会、日本血液学会、日本リンパ網内系学会

## 専門は白血病や悪性リンパ腫などの血液腫瘍の治療

## ホスピスは考えてきた医療が実践できる場所

四月一日から函館おしま病院（函館市の場町、福徳（雅章院長）の副院長に就任したのが伊達基医師だ。高校時代（函館ラ・サール高校）は最初、小学校の教師になることを望んでいたが、その後、医学部を目指し小児科医になることを決意する。

平成九年に東海大学医学部を卒業。二年間のスーパードクターで各診療科を経験するが、専門を小児科から血液内科に変更した。「大学の小児科は骨髄移植の専門機関として難しい症例の子供が全国から集まってきました。そこでは積極的な治療を行っています

すが、残念ながら亡くなる子供も多く、気持ちが萎えてしまうことはよくありました」。そうした時期に血液の領域に興味を持った。「血液内科は主に白血病や悪性リンパ腫などの血液腫瘍の治療に取り組んでいるのですが、これらの疾患の多くは治療が困難です。

しかし、他科に移行するようなことはなく、最初から最後まで自分達で担当するという醍醐味に魅力を感じてきました。重症の患者さんが多く、しかも再発、治療、緩解を繰り返すので、そのときのベストサポートを考えるのが血液内科の役割だと言えます」。

函館おしま病院に赴任してホスピスのイメージが大きく変わったと伊達副院長は話す。「医療的に必要なことは積極的に行っている

点は今これまで勤務してきた急性期病院と同じです。また医師と看護師、栄養士、ケースワーカーなど病院の多くのスタッフが患者さんを真ん中にして円になって支えているなど本場のチーム医療が実践されていることに感心しました」。

赴任後、一番驚いたのはモルヒネの使い方が違った。「一般病院でもモルヒネはよく使われるようになってきましたが、これだけ適切な使い方をしているところは他にはありません。理論に基づいて、ちゃんと計算された使い方をしていますし、とにかく痛みは徹底的にとるといふ取り組みが高く評価できます」。

これまでの経験を活かして、病気と上手に付き合っていくことができるように、精神的な面もサポートしていきたいと話す。「それは患者さんばかりではなくご家族も同様です。ホスピスとは自分が考えてきた医療が実践できる場所です。患者さんにもご家族にも当院に入院・通院して良かったと思える医療を追求していきます」